

学生の看護研究集録集における在宅看護研究の動向

—過去9年間の分析より—

栗本 一美¹⁾*

1) 看護学科

(2008年11月12日受理)

看護実践の場において看護研究は、患者により質の高いケアを提供することと、問題解決能力を養うことの目的に行われ¹⁾、欠かせない取り組みになってきている。看護基礎教育においても、学生たちが研究的手法や態度、倫理的思考過程を体験することによって、看護専門職として必要な問題解決能力や看護を学問として学び続ける姿勢に繋がることを期待している。

そこで、A短期大学看護学科の1999年から2007年までの「看護研究集録集」に掲載された、学生の看護研究の中から、在宅看護に関する研究を分析し、動向を明らかにした。その結果、学生のテーマの選定の傾向には、社会背景との関連が伺えた。また調査方法では、面接や半構成面接法など直接聞くことができる方法をとる傾向にあることがわかった。

今後は、このような学生の動向を踏まえ、学生がより主体的にかつ継続的に看護研究に取り組んでいくことができるような指導をする必要性があることが明らかになった。

(キーワード) 在宅看護、看護研究、看護学生

はじめに

看護の発展には、臨床における看護ケアの向上に焦点を当て、ケアの実施から評価までを含んだ研究の推進が必要である。現在、多くの臨床現場では、日々の看護ケアに追われ、研究活動を行うには必ずしも容易でない現状の中でも看護研究への取り組みは欠かせないものとして取り組まれている²⁾。

そこで、看護基礎教育においても「看護研究」は、学生たちが研究的手法や研究的態度、倫理的思考過程を体験することによって、研究過程や主体的に学ぶ姿勢を育成し、将来看護専門職として必要な問題解決能力や看護を学問として学び続ける姿勢につながることを期待している。3年課程のA短期大学看護学科では、昭和55年の開学当時より「看護研究」を科目とし、学生一人一人が研究テーマを選定し、論文作成、学内看護研究発表会での発表と一連の流れを経験するように取り組まれている。

今回、A短期大学看護学科で1999年から2007年までの9年間に取り組まれた学生の看護研究集録集の中から在宅看護に関する研究論文を分析し、在宅看護領域における学生の研究の動向を明らかにし、今後の学生の看護研究指導の在り方について考察することとした。

I. 研究目的

A短期大学看護学科で1999年から2007年までの9年間に取り組まれた学生の看護研究集録集の中から在宅看護に関する研究論文を分析し、在宅看護領域における学生の研究の動向を明らかにし、今後の看護研究指導の示唆を得る。

II. 研究方法

1. 調査対象：

A短期大学看護学科で1999年から2007年の9年間に取り組まれた学生の看護研究562件のうち、看護研究集録集の中から在宅看護領域に関する論文59件を分析対象とした。

2. 調査期間：2008年8月～9月

3. 調査方法：

研究の動機、調査方法、調査内容などに関しては経年変化で整理し、研究テーマはその類似性によって分類した。類似性の分類に関しては、オブザーバーからのアドバイスをもらい信頼性と妥当性に努めた。

*連絡先：栗本一美 看護学科 新見公立短期大学 718-8585 新見市西方1263-2

Ⅲ. 倫理的配慮

1999年から2007年に「看護研究集録集」として公表された論文を対象とした。また、この期間に「看護研究集録集」に掲載している卒業生に、研究の目的と方法、匿名性の保持について、さらに今回の研究に対して同意できない場合は、担当者に連絡をすることなど書面をもって説明と依頼し同意を得た。

Ⅳ. A 短期大学看護学科「看護研究」の講義概要

1. 「看護研究」の授業目的

「看護研究」の授業は、2単位30時間（必修）として行っている。学生は、2年次後期から3年次の1年間かけて研究に取り組んでいる。この授業目的は、「研究活動の基礎を学び、研究的態度を養う。」ことと、「研究活動を通して自己の看護観を深める。」の2点を目的と、1.看護研究の必要性を理解する。2.論理的思考力、判断力を身につける。3.研究の方法論を理解する。4.学術論文のまとめ方を理解する。5.研究発表方法を学習し、研究発表の運営を体験する。の5つの目標を掲げている。授業計画については、表1に示す。

この授業の特徴は、学生自らが関心のあるテーマを学生一人一人が選定し、研究フィールドを決定し、データの収集、分析及び論文作成の過程を担当教員と1対1の指導のもとで体験する。そして看護研究集録集にまとめ、その後、口演または示説発表のどちらか学生の希望する形で、学内発表会を経験する。担当教員は、学生が主体的に取り組むことに重きを置き、学生の興味関心や問題意識を大切にしながら指導している。

表1 看護研究授業計画

2年次生		3年次生	
第1回	看護研究ガイダンス	第1回	研究活動ガイダンス
第2回	研究の意義と進め方	第2回	研究活動
第3回	文献研究		
第4回	事例研究		
第5回	調査研究		
第6回	実験研究		
第7・8・9回	研究活動		
第10・11回	研究発表会参加	第11回	
第12・13回	研究活動	第12・13回	研究発表会準備
第14回	データ処理と図表作成	第14回	研究発表会
第15回	論文の書き方、レポート作成	第15回	

V. 結果

1999年から2007年までの「看護研究集録集」に記載されていた論文は、562件であった。そのうち、テーマに在

宅看護に関するものが書かれている論文を検討し抜粋した。その結果、在宅看護に関する研究論文は58件(10.3%)であった。経年別にみると、1999年は2件(3.4%)と一番少なく、2004年は13件(22.4%)と最も多かった(表2)。

研究の動機に関しては、大きな項目として「自己の経験からの研究」と「自己の興味や関心からの研究」に分類出来た。その結果は、「自己の経験からの研究」が25件、「自己の興味や関心」が33件であった。「自己の経験」が動機となった研究の内訳は、自己体験のものが17件、授業や実習が8件であった。「自己の興味・関心」が動機となった研究の内訳は、33件すべて社会的関心であった(表2)。

表2 在宅看護に関する研究の経年経過と調査内容

経年別総数										
	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	合計
総数	2	5	7	8	6	13	4	8	5	58

調査の動機											
	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	合計	
自己の経験	自己体験	2	1	3	2	2	3	1	2	1	17
	授業実習			2	2	2	1	1			8
興味・関心	社会的関心		4	2	4	2	9	2	6	4	33
合計	2	5	7	8	6	13	4	8	5	58	

研究方法は、面接・半構成面接法を用いたものが25件(43.1%)と最も多く、次いでアンケート調査13件(22.4%)、聞き取り調査8件(13.7%)、事例研究5件(8.6%)、訪問調査4件(6.8%)、参加観察法2件(3.4%)、文献研究1件(1.7%)であった(表3)。

表3 在宅看護に関する研究の調査方法

調査方法	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	合計
事例研究			1	3		1				5
文献研究					1					1
アンケート調査		1	2	1	3	3	1	1	1	13
面接・半面接調査	1	1	2	3	1	7	1	5	4	25
参加観察法		1		1						2
聞き取り調査			1		1	2	2	2		8
訪問調査	1	2	1							4
合計	2	5	7	8	6	13	4	8	5	58

研究テーマに関しては、研究テーマ別に類似性で分類した。その結果11グループに分類できた。研究テーマとして挙げられていたものとその内容を多い順にみると、「在宅介護」が12件(20.6%)と最も多く、その内容は家族介護者の介護負担感や介護上の問題などの内容であった。次に多かったのが、「在宅サービス」、「社会制度」が各9件(15.5%)で、在宅サービスの利用時の抵抗感や在

宅サービスの満足感などの内容や、介護保険制度や障害者自立支援法に関する内容であった。次に、「障害者への在宅ケア」が8件（13.7%）で、地域で障害を持ちながら生活している小児から高齢者までの障害者本人と家族への支援方法などが記載されていた。次に、「訪問看護」「日常生活への援助」が各4件（6.8%）で、訪問看護師の役割に関する内容や在宅療養者の日常生活への援助についての内容が記載されていた。次に、「在宅ターミナル」が3件（5.1%）で、在宅死に関しての内容であった。そして、「対象者のQOL」、「継続看護」、「地域医療」が各2件（3.4%）で、対象者の生きがいや病院から在宅へ移行するにあたっての支援方法や、離島における緊急医療システムなどがそれぞれのテーマで記載されていた（表4）。

表4 在宅看護に関する研究の研究テーマ別

研究テーマ別	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	合計
医療依存度			1				1		1	3
訪問看護		1				2		1		4
日常生活への援助				1	1	1		1		4
在宅介護			1	1	2	5		2	1	12
在宅サービス	2			3		2	1	1		9
在宅ターミナル			1			1		1		3
対象者のQOL						1		1		2
継続看護				1			1			2
障害者への在宅ケア			1	2	2	1			2	8
社会制度		4	2		1		2			9
地域医療			1						1	2
合計	2	5	7	8	6	13	4	8	5	58

調査対象者は（複数回答）、「家族介護者」が最も多く24件、次いで「要介護認定者」、19件、「地域住民」、「訪問看護師」が各7件、「障害者・児本人」、「障害者を抱える家族」が各5件、「一般高齢者」が4件、病院スタッフなどが「その他」3件、「学生」2件、「家族介護者以外の家族」が1件であった（表5）。

表5 在宅看護に関する調査対象別（複数回答）

調査対象別	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	合計
地域住民	高齢者	2		1				1		4
	住民			3	1	1		1	1	7
訪問看護師		1		1		2		3		7
家族	介護者		1	2	2	3	7	3	4	24
	家族	1								1
要介護認定者		3	2	2	1	6	3	1	1	19
障害者	本人		1	1	2					5
	家族			1	1	1				5
学生		1						1		2
その他				1	1				1	3
合計	3	6	8	10	9	16	7	10	8	77

VI. 考察

学生が看護研究を取り組む動機に関しては、自己の経験が動機付けになるよりも自己の興味や関心から研究に取り組んでいるものが多かった。特に自己の興味・関心の内訳をみると、全てにおいて、社会的関心から研究に取り組んでいることが分かった。社会的関心から取り組まれたのは、特に公的介護保険法が開始となった2000年以降からは毎年、公的介護保険法に関する研究が取り組まれている。さらに2007年には、障害者自立支援法に関する研究も取り組まれており、学生は社会に目を向けていることが伺え、その姿勢は高く評価できることだと言える。

また、自己の経験が動機になっているものをみると、自己の身近な家族や友人などとの関わりの中から動機を得ているものが多かったが、授業や実習が動機になっているものは少なかった。自己の身近な家族や友人から動機を得ていることは、内面的把握や家族ダイナミクスという外から捉えることの出来ないものを考える機会になっていると考える。

松本ら³¹⁾は1992年から5年間、A短期大学の看護学生の看護研究の動向について調査を行った結果、全体的に看護的関心が最も多かったと報告している。しかし、今回の調査では、看護的関心が動機となっているものはなかった。授業や実習、看護的関心が動機に挙がらなかったのは、在宅看護の授業は、2年次後期にあり看護研究の授業開始と同時期からの開始である。そのために、学生が研究テーマを選定しテーマ提出する時期には、まだ在宅看護の授業は、在宅看護の社会背景や位置付け、対象理解の一部しか講義が進んでいない状況である。学生は在宅看護そのものに関しては、全く触れていない時期にテーマ提出しているの、学生の動機付けにはなりにくいと考ええる。また看護研究の科目は、松本らが調査した1992年の時期よりも開始時期が早まり、テーマ提出が早くなっていることから看護的関心も得られにくいのが理由だと考える。

研究テーマに関しては、公的介護保険開始後から家族介護者の介護負担など「在宅介護」に関してのテーマや要介護者が利用している在宅サービスの満足度など「在宅サービス」に関してのテーマが毎年選定されている。しかし、在宅看護の要とされている「訪問看護」に関してや在宅療養者の「日常生活への援助」や医療依存度の高い在宅療養者を対象とした「医療依存度」や在宅死に関しての「在宅ターミナル」など在宅看護ケアに関してのテーマの選定が少ない。また、病院から在宅への移行にあたっての看護の継続性など、これからますます問われる「継続看護」の視点の研究も少ない。これらのことは、研究の動機と同様のことが伺え、看護研究のテーマ

選定の時期と在宅看護の授業の進行状況の影響を受けていると考えられる。

学生が研究に取り組む動機やテーマ選定には、学生自身が「なぜ？」という疑問を持ち、「自分自身はなにを知りたいのか、何を明らかにしたいのか」を明確にしていくことから始まる。そして自分が疑問に感じたこと、より深く知りたいと思ったことを明確にしていく楽しみを体験して欲しいと考えている。そして課題や目的を精選していくプロセスに時間をかけ、しっかり考える時間を大切にしたい。しかし、3年課程ではそのための時間的余裕がないのが現状である。小野寺¹⁾は「3年間という教育期間の中で、看護研究についての正規の講義以外のさまざまな看護教科目に看護研究の意義、具体例などを盛り込み、絶えず学生にそれとなく刺激を与えることは有益である」という提言している。このことは重要である。今後、社会背景を考えると在院日数の短縮化によって、在宅に医療依存度の高い人が移行する状況はますます増える。このことにより、在宅でも看護の質が問われてくるのが予測できる。今回の調査では、「日常生活への援助」や「医療依存度」、「在宅ターミナル」など療養者に直接ケアする看護活動に関しての研究が少ないことがわかり、今後は、学生の看護研究テーマの選定の時期に合わせ、在宅看護に興味・関心を持つことができるように、授業などで在宅看護領域の中で看護研究がどのように取り組まれ、その研究結果が、実践にどのように活かされているのかなど、具体例を盛り込みながら、学生に伝えていくことも必要だと考える。そして、学生が在宅での看護ケアの本質を問う視点で研究に取り組み、その研究を通して看護を探究する態度を身につけられるような指導を心掛けていかなければならないと考える。

また、現在学生は自分の興味・関心を持った研究テーマを選定しているが、テーマ選定にかかる時間が少なく、教員と十分ディスカッションを行ったり、文献検索を十分に行ったうえで取りかかっている学生は少ないように思われる。そこで、同じようなテーマ選定をした学生同士、または学生と教員とが文献を通して十分なディスカッションを繰り返し行う時間や場を提供していく必要性があり、今後検討していく課題である。

研究方法に関しては、面接・半構成面接法を用いたものが最も多く、次いでアンケート調査、聞き取り調査、事例研究、訪問調査、参加観察法、文献研究であった。この研究方法から文献研究や参加観察法を除くと学生は、面接・半構成面接法や聞き取り調査など直接対象者と会い、データを収集する方法が33件(56.8%)と多い。このことから、直接被面接者と会いデータ収集する方法の場合、面接者と被面接者との相互作用が重要である。そのよし悪しが研究の内容や正確さ、深さに影響を及ぼすことを学生に伝え、面接マニュアルなどを作成する必要も

検討しなければならない。また、学生のマナーなどの社会性も身につけていくことが出来るような指導も心がけていく必要があると考える。

調査対象者(複数回答)に関しては、公的介護保険法の施行があった2000年以降、「家族介護者」を対象とした研究が毎年みられる。同様に、「要介護認定者」を対象とした研究もこの年を機に毎年みられている。また、地域に住む住民や障害を持ちながら生活している障害者・児を抱えている家族にも視点を持ち、研究の対象として捉えることができていた。このことは、在宅看護の対象理解が出来ていると言える。

しかし、在宅看護の担い手である訪問看護師や在宅療養者に関わる保健・福祉の関係職種を対象とした研究が少ない。学生は、在宅療養者と家族を中心に考えることは出来ているが、その周囲への目を向けることが出来ないことが推察でき、視野の広がりが必要と考える。特に、保健・医療・福祉の関係職種は、在宅療養生活や家族介護者を支えるには必要不可欠な人材であり、多くの職種と看護職は協力し、連携をとっていかなければ、在宅療養者と家族を支えていくことが出来ない。そのため他の職種を理解し看護師としての役割を深めていくことも必要である。

看護研究の目的は、「研究活動の基礎を学び、研究的態度を養う。」ことと、「研究活動を通して自己の看護観を深める。」ことである。今後も学生の看護研究を通して、学生の思考能力を鍛えるためにも、教員側がすぐに答えを出すのではなく、学生にじっくり考える時間をなるべく設け、見守る姿勢をとりつつ、適時声をかけをしながら軌道修正し、学生が主体的に研究活動に取り組み、そして研究的態度も身につけていくことが出来るように関わっていきたい。そして将来学生が、臨床(看護)現場に立ったとき、常に臨床の中で行う日常的看護ケアの中から疑問や問題を見つけ、その問題の原因あるいは答えを探究し、より良い看護ケアを提供できる看護職になることを期待し、教員としてどれだけ学生と関わっているかを内省し、学生が満足する指導をしていきたいと考える。

参考文献

- 1) 武富敦子：状況に応じて体制を変革し研究者を支援、看護, 55 (12), 51,
- 2) 西田直子・倉ヶ市絵美佳・小山洋子他：京都市内の国立病院における看護研究活動の現状-活動状況および環境条件を中心に-, 第30回 日本看護学会論文集 看護管理 119-121, 1999
- 3) 松本幸子・金山時恵・木下香織他：新見女子短期大学における学生の看護研究の動向-一過去5年間の分析よ

り—新見女子短期大学紀要,18,93—99,1997

- 4) 小野寺杜紀：卒業研究の目的、指導にあたって—準
学士の卒業研究—QualityNursing,5(2),4—8, 1999

Trends in Students' Studies on Home Nursing

Kazumi KURIMOTO

Summary

Nursing research is conducted for the researcher(s) to learn how to provide higher-quality care for patients, and cultivate their problem-solving skills 1); it is becoming an essential activity at sites of nursing practice. In basic nursing education, nursing research is also conducted with the expectation that students will develop problem-solving abilities required of nursing specialists as well as an attitude to continuously explore nursing science by experiencing research methodologies, attitudes toward research, and the process of ethics-based thinking.

Thus, research papers on home nursing published in the 1999 to 2007 “collected nursing research papers” from the nursing department of A Junior College were analyzed to identify trends in students' studies on home nursing. The results suggested that the trend in students' selection of a study theme was associated with their social background. It was also found that they had a tendency to employ a direct approach to the subjects, such as an interview or a semi-structured interview. In the light of these trends in students' studies, it is necessary to guide nursing students so that they can more proactively and continuously commit themselves to nursing research.

Keywords:home nursing, nursing research, nursing student